

『頼政記』 翻刻（附 源平盛衰記・延慶本対照）

櫻 井 陽 子

国立公文書館（内閣文庫）所蔵『頼政記』は、高橋伸幸氏によって紹介された<sup>(1)</sup>、読み本系『平家物語』を用いた写本である。『平家物語』十二巻本では巻四の後半部にあたる。以仁王の乱が失敗に終わった後、昔、登乗という人相見がいたことを紹介する話から始まり、末尾は以仁王に加担した三井寺と南都の僧を召禁するという記事で終わる。氏は『頼政記』が読み本系（増補系）に属することから、現存読み本系諸本（四部合戦状本・源平盛衰記・延慶本）と対照しながら翻刻を行った。なお、長門本には該当部分がない。後に、松尾葦江氏は高橋氏の翻刻の若干の誤植を訂し、諸本との校異を付して再翻刻を行った<sup>(2)</sup>。

本文・内容については、早川厚一氏によって論じられているが、なお考察の余地があると考え、拙稿「『頼政記』考——源平盛衰記を遡る本文として、教戒の書として——」で考察を加え、<sup>(4)</sup>『頼政記』の親本は盛衰記を遡る本文であること、若干の本文改変・増補があること、また、教戒の書として『平家物語』を受容する姿勢が読み取れることを指摘した。但し、本文の詳細な引用は紙面の都合もあり、できなかった。

近年では、国立公文書館でのインターネット公開により、本文の閲覧も容易にはなったが、諸本を見比べるためには、高橋氏の諸本対照表が至便である。ただ、入手しがたくなっており、ここで改めて本文を翻刻し、諸本対照を行うこととした。なお、氏は四部合戦状本も併せて対照表を作成しているが、本稿では紙面の都合上、『頼政記』、盛衰記、延慶本の三本を対照した。拙稿では四部本も併せて考察をし、また、内容を項目毎に記した表では四部本も併載しているので、適宜参照していただけたら幸いである。

『頼政記』の本文表記は漢字片仮名交じりだが、後半に、ほぼ一丁分、漢字平仮名交じり表記部分がある。親本の段階で底本を変更したのかとも思われるが、内容の連続性に違和感はない。

また、和歌・連歌以外は続け書きされているが、改行が五ヶ所ある。改行の理由は様々に考えられるが、本稿では「改行」としてその箇所を示すに留めた。

#### 注

- (1) 高橋伸幸「内閣文庫所蔵 増補系平家物語零本に就きての研究〈本文篇〉」(札幌大学教養部・女子短期大学部紀要) 十九号、一九八一年九月
- (2) 松尾葦江『軍記物語論究』(若草書房、一九九六年六月) 資料2
- (3) 早川厚一「『頼政記』の成立―『平家物語』諸本との関係―」(名古屋学院大学論集 言語・文化篇) 二十卷二号、二〇〇九年三月
- (4) 延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 別巻』(汲古書院 二〇二二年十二月)

## 凡例

- 一 内閣文庫蔵『頼政記』（袋綴じ冊子本。墨付二十三丁、漢字片仮名交じり表記、一面九行）の翻刻を上段に行う。その本文の質を理解するために、源平盛衰記巻十五・十六、延慶本平家物語第二中（巻四）の該当部分を、中段・下段に引用する。
- 一 本文は通行の表記を用い、誤写・誤字と思われる場合は、右傍に訂正を施し、句読点、括弧等を私意によって附した。盛衰記は『源平盛衰記』（底本は古活字版 三弥井書店）、延慶本は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）に拠る。句読点・括弧等は底本を変更した箇所がある。
- 一 対照の便のために、『頼政記』を中心に、三本の本文を適宜改行した。
- 一 『頼政記』が改行を施している箇所には、「(改行)」と示した。
- 一 盛衰記は目録名を、延慶本は章段名を、で示した。
- 一 1～10、①～⑥、破線は内容によって区切ったものであり、A～Mは評言部分、a～dは和歌・連歌に附した番号で、拙稿の表に対応している。
- 一 盛衰記・延慶本の本文のうち、『頼政記』にない部分は、( )に内容を紹介して、本文を省略した。なお、7の延慶本は、一方系の混態部分と独自増補部分であることから、省略した。

卷十五 南都騒動始

又右大将宗盛子息侍従清宗ハ、三位シテ三位侍従ト云。今年十二ニ成給フ。二階賞預給ケル間、叔父ノ藏人頭ニテ御座スル重衡ヨリ始テ、多ノ人ヲ越給ケリ。宗盛卿ハ此年ノ程マデハ、兵衛佐ニテコソ御坐シニ、是ハ上達部ニ至リ給ヘリ。世ヲトル人ノ子ト云ナガラ、一ハヤクヅ覺エシ。「一人ノ嫡子ナドコソ加様ノ昇進ハシ給ヘ」ト、時ノ人傾申ケリ。

聞書ニハ、「父前右大将ノ、源以光并頼政法師已下、追討ノ賞」トゾ有ケル。源以光トハ高倉宮ノ御事也。法皇ノ王子ニテ御座サズト云成シテ、源ノ性ヲ奉リ、凡人ニサヘ奉レ成事、浅間シトモ云計ナシ。

相形

B 「抑、相者洽浩ニ五天之雲、洪携九州之風。五行結氣、成膚成形。四相稟運、保寿保神。月氏映光、教主积尊屢応其言、

廿三 大将ノ子息三位ニ叙ル事

大将ノ子息侍従清宗、今年十二ニ成給ヘルガ、三位シテ三位中将ト申ス。二階ノ賞ニ預給フ間、叔父藏人頭ニ居給ヘル重衡卿ヨリ初テ、若干人々越ラレ給ニケリ。宗盛卿ハ、此人ノ程ニテハ、兵衛佐ニテコソオハセシニ、是ハ上達部ニ至リ給コソ、世ヲ執給ヘル人ノ御子ト云ナガラ、一早クオソロシケレ。「一人ノ嫡子ナドコソ加様ノ昇進ハシ給ヘ」ト、時ノ人傾キアヘリ。

「父前右大将ノ、源以光高倉并頼政法師已下、追討ノ賞」トゾ聞書ニハ有ケル。皇子ニハオハシマサズト云ナシテ、源以光ト号シ奉ル。正キ法皇ノ御子ゾカシ。凡人ニサヘ成シ奉ルコソ心憂ケレ。

A 頼政ハユ、シク申シカドモ、遠国マデハ云ニ不レ及、近国ノ者モ念ギ打上モナシ。語ツル山門ノ大衆サヘ心替シテシカバ、云甲斐ナシ。

1

B 「抑、相者洽浩五天之雲、洪携九洲之風。五行結氣、成膚成形。四相稟運、保寿保神。月氏映光、教主积尊屢応其言、

日域伝景、太子上宮、剃頭厥証。一行禪師者、漢家三密之大祖也。円輪満月床傍、審一百廿之篇章、延昌僧正者、我朝一宗之先賢也。男女三千之窓内、省七十余家之施設。内外共儂此術、凡聖同弘斯業。

サレハ昔、登乗ト申相人アリキ。帥内大臣伊周ヲハ流罪ノ相御坐ス、頼通宇治殿・教通二条殿二所ナカラ御命八十、共三代ノ関白ト相シ奉リタリケルモ、少シモ不違ケリ。

又聖德太子ハ、崇峻天皇ヲ、「横死ノ相御坐ス」ト申サセ給ケルニ、馬子大臣三被殺給ケリ。

太政大臣兼家ノ四男ニ粟田関白道隆三ノ不例ヲハシケルニ、小野宮右大臣実頼ノヲハシタリケレハ、御簾コシニ物語シ給テ、久ク代ヲ治メ給ヘキヨシ被仰ケルニ、風ノ御簾ヲ吹アケタリケルヒマヨリ見奉リ給テ、「只今可失給人」ト被仰タリケル

屢応三其言、日域伝景、太子上宮、剃頭其証。一行禪師者、漢家三密之大祖、円輪満月床傍、審一百二十之篇章、延昌僧正者、我朝一宗之先賢、界如三千之窓内、省七十余家之施設。内外共厲此術、凡聖同弘斯業。ナジカハ違ベキ。

サレバ昔、登乗ト申相人アリキ。帥内大臣伊周ヲバ、「流罪相御坐」ト相タリケルガ、彼伊周公ノ類ナク通給ケル女房ノ許ヘ、寛平法皇ノ忍テ御幸成ケルヲ、驚シ進セントテ、藁目ヲ似テ射奉リタリケレバ、被流罪レ給ヘリ。又太政大臣頼通宇治殿・太政大臣教通二条殿二所ナガラ御命八十、共三代ノ関白ト相シ奉タリケルモ、少モ不違ケリ。

又聖德太子ハ、御叔父崇峻天皇ヲ、「横死ニ合給ベキ御相御座」ト仰ケルニ、馬子ノ大臣二被殺給ケリ。又太政大臣兼家東三殿四男二、粟田関白道兼ノ不例ノ事オハシケルニ、小野宮ノ太政大臣実頼、御訪ニ御座タリケレバ、御簾越ニ見參シ給テ、久世ヲ治給ベキ由被仰ケルニ、風ノ御簾ヲ吹揚タリケル間ヨリ奉見給テ、「只今失給ベキ人」ト被仰タリケルモ不違ケリ。

登乗ト申相人アリ。「帥ノ内大臣ハ通隆卿子伊周公流罪ノ相ヲハシマス。宇治殿・二条殿、二所ナガラ御命ハ八十、共三代ノ関白」ト奉相タリシハタガハザリケル者ヲ。

C 此少納言モ目出キ相人トコソ聞エシニ、「悪ク奉相タリケル」トゾ人申ケル。聖德太子ノ、崇峻天皇ヲ、「横死ノ相ヲハシマス」ト申サセ給ケルモ、馬子ノ大臣二被殺給。

粟田ノ関白不例ヲハシケルニ、小野宮右大臣実資ヲハシタリケレバ、御簾ゴシニ見參シ給テ、「久ク世ヲ可納給」之由、粟田殿被仰ケルニ、風ノ御簾ヲ吹上タリケルニ見タテマツリ給ケレバ、「只今失給ベキ人」ト見給ケルニ、程ナク隠給ニケリ。

モ不違ケリ。

御堂ノ馬頭顯信ヲ、「齊信ノ民部卿ノ聳ニトリ給」ト人申ケレハ、「只今出家ノ相アリ、イカ、」ト被申ケルカ、則出家シ給ケリ。

六条右大臣ハ、白河院ヲ、「御命ハ、長ク渡セ給ヘキカ、頓死ノ相御坐」ト申タリケルモ不違ケリ。

サモ可然人々ハ、相人トシモナケレトモ、皆カク眼賢クソ御坐ケル。

C 其ニコノ少納言惟長モ目出相人ナリケレハ、露見損事ナシ。サレハ、「相少納言」トソ申ケル。高倉宮ヲハ何ト見奉タリケルニヤ、「位ニ付セ給ヘキ」ト申タリケルニ、今カクナラセ給ヌルコソ、「可然事」ト申ナカラ、相少納言誤ニケリ」ト申ケレ。

2

高倉宮ニハ、御子腹々ニアマタ御坐ケルモ、宮被打サセ給ヌト聞食ケレハ、世ヲ恐サセ給テ、散々ニ逃隠サセ給テ、此彼

又御堂馬頭顯信ヲ、「民部卿齊信ノ婿ニトリ給へ」ト人申ケレバ、「此人近ク出家ノ相アリ、為レ我為レ人イカ、ハ」ト被レ申タリケルガ、終二十九ノ御年出家アリテ、比叡山ニ籠ラセ給ニケリ。

又六条右大臣ハ、白河院ヲ見進テ、「御命ハ長ク渡ラセ給ベキガ、頓ノ御相御坐」ト申タリケルモ不違ハザリケリ。

サモ然ベキ人々ハ、必相人トシモナケレ共、皆カク眼カシコクゾ御座ケル。

C 況ヤ此少納言惟長モ目出キ相人ニテ、露見損ズル事ナシ。サレバ異名ニ、「相少納言」トコソイハレケルニ、高倉宮ヲバ何ト見進タリケルヤラン、「位ニ即給ベシ」ト申タリケルガ、今角ナラセ給ヌルコソ、「然ベキ事」ト申ナガラ、相少納言誤ニケリ」ト申ケリ。

宮御子達

高倉宮ニハ、腹々ニ御子アマタマシクケリ。宮討レサセ給ヌト披露アリケレバ、世ヲ恐マシクテ、散々ニ忍隠サセ給。墨染

御堂ノ右馬頭顯信ヲ、「齋院<sup>信カ</sup>ノ民部卿、聳ニ取給へ」ト人々申ケレバ、「只今出家ヲシテムズル人ヲバ、イカ、」ト被レ申ケル程ニ、即出家シ給ニケリ。

六条ノ右大臣、白河院ヲ、「御命ハカナク渡ラセ給ベシ。頓死ノ相ヲハシマス」ト申サレタリケリ。又、「浅猿事哉。中宮ノ無下ニ近クミエサセ給」ト北方ニ歎申サセ給ケルモ不違ハケリ。

サモ可然人々ハ、必ズ相人ニ非レドモ、皆カクコソヲハスレ。

廿四 高倉宮御子達事

此宮ハ御子モ腹々ニアマタヲハシマシケリ。散々ニ隠レ迷ハセ給キ。世ヲ恐サセ給テ、コ、カシコニテ、皆法師ニ成セ給トゾ聞エ

マテ墨染ノ袖ニヤツレサセ給ヌトソ聞シ。其中ニ伊豆守盛章ノ娘ノ、八条院ニ三位殿ト申テ候給ケルニ、宮忍ツ、通ハセ給ケル。其御腹ニ、若君・姫宮御坐ケリ。三位殿ヲハ、女院コトニ無隔御事ニテ、難去被思食ケリ。

サレハ、此宮達ヲハ、御衣ノ下ヨリ生立マイラセテ、殊糸惜御事ニソ思食ケルニ、高倉宮カク失サセ給ヌト聞食ケルヨリ、御子ノ宮達マテモイカ、ト御心迷シテ、ツヤ／＼供御モマイラス、只御涙ニノミノ咽セ給ケル。

御母ノ三位殿モ、「イカナル事ニカ聞成ムスラム」ト、肝心モヲハシマサス、アキレテ御坐ケル程ニ、池中納言頼盛ハ、女院ノ御方ニウトカラヌ人ナリケルヲ、御使ニテ、前右大将宗盛、女院へ被申ケルハ、「高倉宮ノ若君ノ御坐候ナル、可奉渡」トアリケレハ、女院モ三位殿モ、兼テ思食タル事ナレトモ、今更ナニト可被仰トモ思食シツカス、只アキレテソ渡セ給ケル。日来ハ朝夕仕中納言モ、カク申テ参タレハ、アラヌ人ナ様ニ恐クソ被思召ケル。何レ御大事ニ及トモ、可奉出トモ被思食ナハ、宮ヲハ御寝所ノ内ニカクシヲキ奉セテ被仰

ノ袖ニヤツレサセ給ケリ。

其中ニ伊与守盛章ノ娘ノ、八條院ニ候ハレケル、三位殿ト申ケルヲ、忍ツ、通ハセ給ケルニ、若宮・姫宮御座ケリ。彼三位局ヲバ、女院殊ニ隔ナキ御事ニ思召レケレバ、此宮達ヲモ、御衣ノ下ヨリ生立進セ給テ、御イトヲシキ御事ニゾ思召ケル。宮御謀叛起シテ失サセ給ヌト聞召シヨリ、御子達モ御心迷シテ、ツヤ／＼貢御モ進ラズ、唯御涙ニ咽バセ給ケリ。

御母ノ三位殿モ、「何ナル御事ニカ聞成奉ラン」ト、肝心モ御座マサズ、アキレテ御坐ケル程ニ、池中納言頼盛ハ、女院ノ御方ニ疎カラヌ人也ケルヲ、御使ニテ、前右大将宗盛、女院へ被申ケルハ、「高倉宮ノ若君ノ御座候ナル、渡奉ベシ」ト有ケレバ、女院モ三位殿モ、兼テ思召儲タル御事ナレ共、今更イカニ被仰ベキトモ思召分ズ、只アキレテゾオハシケル。

日比ハ朝夕仕中納言ナレドモ、カク参テ申ケレバ、アラヌ人ノ様ニ恐シクゾ思召レケル。イカナル御大事ニ及トモ、出奉ベシトモ思召レネバ、宮ヲハ御寝所ノ内ニ隠シ

シ。

伊与守顯章ノ娘ノ、八条院ニ三位殿ト申テ候給ケルニ、此宮忍ビツ、通セ給ケル。其御腹ニ若宮・姫宮ヲハシマシケリ。三位殿ヲバ、女院殊ニ召仕ハセ給ツ、隔ナキ御事ニテ有ケレバ、難去思食ケリ。

此宮達ヲモ、女院只御子ノ如ニテ、御衾ノ下ヨリオ、シタテマツラセ給ヘリ。糸惜悲キ御事ニゾ被思食ケル。高倉ノ宮謀叛ノ聞エヲハシマシテ、失サセ給ヌト聞召ケルヨリ、此宮達マデモイカニト思食ケルヨリ、御心迷テ、供御モマイラス、只御涙ノミセキアヘズ。

御母ノ三位殿ハ肝心モヲハシマサズ、アキレテヲハシマシケル程ニ、池ノ中納言頼盛ハ、女院ノ御辺ニウトカラヌ人ニテヲハシケルヲ、御使ニテ、「高倉宮ノ若君ノヲハシマシ候ナル、可被奉出」之由、前大将、女院へ被申入タリケレバ、思食儲タル御事ナレドモ、イカニ被仰トモ思食ワカズ。

日比。朝夕仕中納言モカク被申テ被参タル間、怖シク思食シテ、アラヌ人ノ様ニケウトク思食レケルコソ、責テノ御事ト覺シカ。イカナル御大事ニ及トモ、可奉

ケルハ、

「カ、ル世ノ騷ノ聞、シ暁ヨリ、此御所ニハヲハシマサス。御乳人ヲトカ心ヲサナク奉具ヲ失ニケルニコソ。イツクトモ行ハテ不<sub>レ</sub>知」ト被仰ケレトモ、入道憤<sub>リ</sub>深事ナレハ、大将モ不等閑被申ケリ。中納言モ情ヲ係ケ奉<sub>リ</sub>カタクテ、軍兵多門々ニ居置<sub>ナ</sub>ト<sub>レ</sub>テ、ハシタナキ事カラナリケレハ、御所中上下、色ヲ失ツ、イト、騷<sub>キ</sub>アエリ。

世カ代ニテアラハヤ、法皇ニモ申サセ給<sub>キ</sub>、去年ノ冬ヨリ被<sub>レ</sub>打籠<sub>マシ</sub>テ、心優<sub>キ</sub>御有様也シカハ、イト、イカニスヘシトモ思食サリケリ。

若公モ少<sub>キ</sub>御心ニ、事ノ有様難遁トヤ思食ケン、「此<sub>レ</sub>程ノ御大事ニ及ハム上ハ、只出サセ給へ、我故ニ御所中ノ御煩<sub>モ</sub>痛敷候」ト申サセ給ケレハ、

女院ヲ始奉<sub>テ</sub>、御母ノ三位殿、女房達、老タルモ少モ、音ヲ備<sub>テ</sub>泣悲<sub>ミ</sub>給ケリ。心ナキ女童部マデモ皆、袖ヲシホリケリ。

若公今年ハ八ニナラセ給ケルカ、ヲトナシクモ被<sub>レ</sub>仰ケルコソ哀ナレ。中納言モ岩木ナラネハ、ウチシメリテ候ワレケルニ、

置進セテ、

「係ル世ノ騷ノ聞エシ暁ヨリ、比御所ニハ御座サズ。御乳人ナドノ心ヲサナク奉具失ニケルコソ。何処トモ行末シロシメサズ」ト仰ラレケレドモ、入道憤<sub>リ</sub>深事ナレバ、大将モナヲザリナラズ被<sub>レ</sub>申ケリ。中納言モ情ヲカケ奉<sub>リ</sub>難<sub>テ</sub>、兵共多ク門々ニスヘ置テ、ハシタナキ事様也ケレバ、御所中上下、色ヲ失ヒツ、イト、騷<sub>キ</sub>アエリ。

世ガ世ニテモアラバヤ、法皇ヘモ申サセ給<sub>ベ</sub>キ、去年ノ冬ヨリ被<sub>レ</sub>打籠<sub>マシ</sub>テ、御心憂御拳動ナレバ、如何ニスベシトモ思召サ<sub>リ</sub>ケリ。

若公モ少<sub>キ</sub>御心ニ、事ノ有様難遁ヤ思召<sub>レ</sub>ケン、「是<sub>レ</sub>程ノ御大事ニ及バン上ハ、只出サセ給へ、我<sub>ウ</sub>ヘ御所中ノ御煩<sub>モ</sub>痛シ」ト申サセ給ケレバ、

女院ヲ始進<sub>テ</sub>、御母ノ三位ノ局、女房達、老モ若モ、音ヲ調<sub>テ</sub>泣悲<sub>ケ</sub>リ。心ナカルベキ女童部マデモ、皆袖ヲゾ<sub>リ</sub>ケル。

若公今年ハ八ニナラセ給ケリ。ヲトナシクモ被<sub>レ</sub>仰ケルコソ哀ナレ。中納言モサスガ岩木ナラネバ、打シメリテ候ハレケルニ、

出トモ思食レネバ、宮ヲバ御寢所ノ中ニ隱置奉<sub>テ</sub>、池<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>仰ケルハ、

「カ、ル世ノ周章ノ聞エシヨリ、此御所ニハオハシマサズ。御乳ノ人ナドガ心少ク見進セテ、失ニケルニコソ。イツクトモユクエモシラズ」ト被<sub>レ</sub>仰ケレドモ、入道憤<sub>リ</sub>深事ナレバ、大将モ等閑ナラズ被<sub>レ</sub>申ケレバ、中納言情カケ奉<sub>ガ</sub>タクテ、軍兵共門々ニ居ヘナドシテ、ハシタナキ事ガラニ成ケレバ、院中ノ上下、色ヲ失ツ、イト、サハギアヘリ。

世ノ世ニテアラバコソ、法皇ヘモ申サセ給<sub>ハ</sub>ンズレ、去年ノ冬ヨリハ被<sub>レ</sub>打籠<sub>マシ</sub>テ、心ウ<sub>キ</sub>御アリサマナレバ、イト、イカニスベシトモ思食サズ。

事ノ有様叶マ<sub>ジ</sub>トヤ少<sub>キ</sub>御心ニモ思食サ<sub>レ</sub>ケム、「是<sub>レ</sub>程ノ御大事ニ及候ハム上ハ、只出サセ給へ。マカリ候ハム」ト、宮申サセ給ケレバ、

御母ノ三位殿ハ理也、女院ヲ奉<sub>テ</sub>始<sub>テ</sub>、女房達、老タルモ若キモ声ヲ調<sub>ヘ</sub>テ泣アヒ給ヘリ。女官共、局々ノ女童部ニ至ルマデ、此ヲ聞<sub>テ</sub>、袖ヲ絞<sub>ラヌ</sub>ハ無<sub>リ</sub>ケリ。

今年ハ八ニ成セ給ヘルニ、オトナシヤカニ申サセ給ケルコソ難<sub>シ</sub>哀ナレ。中納言モ岩木ナラネバ、打シメリテ候ハレケルニ、



大将ノ許ヨリ、「イカニ〜」ト使頼ケレハ、中納言モ打副ヘ被申ケリ。

女院ハスコシサモヤト聞食事アリ。御尋アルヘキ也トテ、同御年ホトナル少キ者ヲ迎サセ給テ、尋出タル体ニテ、終ニ宮ヲ渡奉ラレ。女院モ三位殿モ、ヲトラシトヲメキ叫ヒ給ケル事不斜。泣々御クシカキナテ、御顔カイツクロヒ、御直垂タテマツラセナトシテ出シ奉セ給。只夢ノ様ニ思食ケル。「イカニナラセ給ハムスラム」ト無御心本。

池大納言モ、「無由御使ニ參ニケルヨ」ト、イト然ノ被思ケルニ、若公ノ出サセ給タルヲ見奉ルニ、ラウタク蔽ク御坐シケレハ、イト、狩衣ノ袖ヲシホリツ、御車ノ尻ニ乗テ六波羅ヘ奉奉ル。

若宮出サセ給ニケル後ハ、女院モ三位殿モ、同枕ニ臥沈テ、温水ヲタニモ御喉ヘ入サセ給ハス。是ニ付テモ女院ハ、「由ナカリケル人ヲ、此七八年手馴シ奉テ、モノ思フ事ヨ」トソ被思食ケル。「七ツハツナトハ、サスカニ未タ何事モ思食ワクヘキニナラネトモ、我故大事ノ出来事ヲ片腹痛ク思食テ、出サセ給ヌル事ノ悲サヨ」トテ、

大将ノ御許ヨリ、「如何ニ〜」ト使頼ニ申ケレバ、頼盛モ打ソヘ被申ケリ。

女院ハ、少シサモヤト聞食御事有テ、同ジ御年程ナル少者ヲ尋サセ給ケレ共、大方ナカリケレバ、力及バセ給ハテ若宮ヲ奉渡ケリ。宮ヲバ女院ノ御前ヘ請出進セテ、御母三位殿、御氣莊進セ御髮搔摩、御ヒタ、レ奉ラセナドシテ出立進セ給テモ、唯夢ノ様ニ思召。「如何ニナラセ給ハムズルヤラ」ト御心元ナケレバ、尽ヌ御涙計ヲ流サセ給ケル。

中納言モ、「由ナキ御使也」ト、イトカナシクゾ被思ケルニ、若宮既出サセ給ヘリ。見進スレバ、ラウタク蔽ク御座シケリ。少キ御心ニモ思召入タル御有様、悲ク思給ヘバ、イト、狩衣ノ袖ヲ絞ツ、御車ノ尻ニ乗テ六波羅ヘ奉渡。

宮出サセ給ニケレバ、女院モ三位殿モ、同枕ニ臥沈テ、湯水ヲタニモ御喉ヘ入サセ給ハズ。コレニ付テモ女院ハ、「由ナカリケル人ヲ、此七八年手ナラシ奉テ、物ヲ思」ト、責テノ事ニハ悔シクゾ被思召ケル。「七八ナドハ、サスガ何事モ思召分ベキ事ナラネ共、我ユヘ大事ノ出来事ヲカタハラ痛ク思召テ、出サセ給ヌル御事ノ悲サヨ」

大将ノ御許ヨリ使頼リニハセ参リテ、「イカニ〜」ト被申ケレバ、ソレニ随テ、中納言モシキリニ責奉ル。

少シサモヤト聞食出事アリ、御尋有トテ、年程同様ナル少者ヲ迎ヘ寄ツ、尋出シ奉リタリトテ、宮ヲツキニ渡シ奉ラル。三位殿モ女院モ、後レ奉ラジト歎悲ミ給事不斜。泣々御頭カキ撫、御顔カイツクロヒ、御直衣奉ラセナド出シ奉ラセ給モ、只夢ノ様ニゾ被思食ケル。「イカニ成給ナムズラム」ト思食サレケルゾ悲シキ。

池中納言奉見テハ、狩衣ノ袖モ絞ル計ニテ、御車ノ尻ニ參テ六波羅ヘ奉渡ラレニケリ。

宮出サセ給ケル後ハ、女院モ御母ノ三位殿モ、同枕ニ臥沈ミテ、湯水ヲタニモ御喉ヘモ不レ被入。「由無カリケル人ヲ此七八年手ナラシ奉テ、カ、ルモノヲ思コソ返々モ悔シケレ。七八ナド云ヘバ、サスガニ未タ何事モ思分ベキ程ニモワタラセ給ハヌニ、我故大事ノ出来事モ片腹痛ク思食テ、出サセ給ヌル難レ有サノ悲シサ」トテ、返々ク

御涙セキアエス。宮六波羅ニ入セ給タリケレハ、大将出合セ候テ見奉セテ、哀ニ被思食ケルニヤ、涙ヲヲシノコヒ給ケレハ、宮モイカニト思食ケルニヤ、同ッ御涙ヲ流サセ給ケリ。「女院ノ御懐ノ中ヨリ養立奉セ給テ、歎<sub>セ</sub>給御事ノ心苦ク候ニ、無殊事御計モヤ有ヘキ」ト、大将ニカキクトキ被申ケレハ、大将又入道ニ能々被申タリケレハ、後白河院ノ御子仁和寺ノ守覚法親王へ奉渡テ御出家アリ。

御名ヲ八道尊ト申ケル。御歳十八ニテ、終ニ失サセ給ニケリ。不審アリ。

又殷富門院ノ女房ノ御腹ニ若宮・姫宮御坐ケリ。若宮ハ御出家アリケレハ、後、安居院ノ宮ト申ケル。東寺ノ一ノ長者也。姫宮ヲハ野依ノ宮ト申ケル。

又南都ニモ御子御坐ト聞ユ。盛興寺宮ヲハ、書写ノ宮ト申ケル。

此外御子一人ヲハ、高倉宮ノ御乳人讃岐前司重季カ、北国へ具下マイラセタリケルヲ、木曾モテナシマイラセテ、越中

トテ、御涙セキ敢サセ給ハズ。宮六波羅ニ入セ給タリケレバ、大将出合見進テ、哀ナル御事ニ奉<sub>レ</sub>思、涙ヲ拭ヒ給ケレバ、宮モ御涙ヲ流サセ給ケル。池中納言頼盛申サレケルハ、「女院御フトコロノ中ヨリ生立進サセ給タリトテ、不<sub>レ</sub>斜御歎、御痛ク御心苦思進セ候。コトナル御事ナキ様ニ、御計モアレカシ」ト宣ヘバ、大将又此趣ヲ入道ニ口説被<sub>レ</sub>申ケレバ、仁和寺ノ守覚法親王へ奉<sub>レ</sub>渡テ御出家アリ。

御名ヲ道尊ト申ケル。彼法親王ハ、則後白河院ノ御子ナレバ、此若宮ハ御甥也。御年十八ニシテ隠サセ給ニケリ。

又殷富門女院ノ御所ニ治部卿局ト申女房ノ腹ニ、若君・姫君マシ<sub>レ</sub>ケリ。若宮御出家ノ後ニハ、安院宮僧正トゾ申ケル。東寺ノ一長者也。姫宮ハ野依宮ト申ケリ。

南都ニモ宮ノ御渡アリ。盛興寺ノ宮ヲバ、書写ノ宮トゾ申ケル。

又御子一人ヲハシケルヲバ、高倉宮ノ御乳人讃岐前司重秀ガ、北国へ具シ下シ進タリケルヲ、木曾モテナシ奉テ、越中国宮崎ト

ドカセ給。大将モ奉<sub>レ</sub>見給テハ、涙ヲ押拭ヒ給ヘバ、宮モナニト思食ケルヤラム、打涙グマセ給ケルゾラウタキ。「女院ノ御懐ヨリ奉<sub>レ</sub>養テ歎思食ル、心苦シサ」ナド、中納言カキクドキ、細々ト被<sub>レ</sub>申ケレバ、大将モ入道ニ不<sub>レ</sub>斜被<sub>レ</sub>申ケル間、後白河院ノ御子、仁和寺守覚法親王へ渡シ奉テ御出家アリ。

御名ヲ八道尊ト申ス。後ハ東大寺ノ長者ニ成ラセ給ケルトカヤ。

D 院ノ御子達、皆御出家アリシニ、此宮ノ心トク御出家タニモアリセバ能リナマシ。無<sub>レ</sub>由御元服ノ有ケルコソ、返々モ心ウケレ。猶御子ハヲハシマスト聞ユ。

一人ハ高倉宮ノ御乳母ノ夫、讃岐前司重季奉<sub>レ</sub>具テ北国へ落下給ヘリシヲバ、木曾モテナシ奉テ、越中国宮崎ト云所ニ御所ヲ立

国宮崎ト云所ニ、御所ヲ造テスエマイラセツ、御元服アリケレハ、木曾ガ宮ト申ケル。

(改行)

D 凡此高倉ノ宮モカスノ外ノ宮ナレハ、御出家タニモアリセハヨカラマシ。無由御元服ノアリテ、君達マテモカ、ルウキ目ヲ御覽セラル、トソ申ケル。

E 夫、不患位之不尊、而患德之不崇、不恥禄之不彰、而恥智之不博トモ申。ヨク、御案ノアルヘカリケルモノヲトソ覚シ。

3

① 昔、延喜ノ帝ノ第十六ノ御子ニ兼明親王、村上帝ノ第八御子ニ具平親王トテ二人坐キ。前中書王・後中書王トソ申ケル。賢王聖主ノ御子ニテ、共ニ才智才学目出ク御坐トモ、

F 帝位ニ即セ給事ハ可然御事ナレハ、然コソヤマセ給シカ、謀反ヲハラコサセ給ハス。

(改行)

云処ニ、御所ヲ造テスヘ進セ、御元服アリケレバ、木曾ガ宮トモ申。又還俗ノ宮トモ申ケリ。嵯峨ノ今屋殿ト申ケルハ此宮ノ御事也。

卷十六 帝位非入力

① 抑昔、延喜帝ノ第十六ノ御子兼明親王ト、村上帝ノ第八ノ御子具平親王トハ叔父・甥ニテ、前中書王・後中書王ト申奉ル。賢王聖主ノ御子、才智才学目出ク御坐シキ。

② サレバ前中書王ハ、御兄ノ第四ノ御子、

テ居奉リツ、御元服アリケレバ、木曾ノ宮トゾ申ケル。又ハ還俗ノ宮トモ申ケリ。

廿五 前中書王事 付元慎之事

① 昔、延喜ノ帝ノ第十六ノ御子兼明親王、村上帝第八御子具平親王トテ、二人ヲハセシヲバ、前中書王・後中書王トテ、賢王聖主ノ御子ニテ、才智才学目出クワタラセ給シカドモ、

F 王位ニ即セ給事ハ別ノ御事ナレバ、サテコソ止ミ給シカ。サレドモ謀叛ヲヤ起シ給シ。

② 中ニモ前中書王ト申ハ、漢才妙ニ御坐

## 4

③ 目近モ、後三条院ノ第三王子輔仁ノ親王ハ、白河院ニハ御弟、目出キ人ニテ御坐シテ、「春宮御位ノ後ニハ、必々此御子ヲ太子ニ可奉立」之由、  
後白河院能々白河院ニ御遺言有ケレハ、  
榎ニ御事請アリ。宮モ、「御讓ヲ可請サセ給」之由、思食ケルニ、

無実ニ依テ城ノ外ニ移サレ給ヒタリケルガ、「宮モ薬屋モ」トナガメ給ケルヲ理リニ思食、王位モ詮ナシトテ、只一筋ニ仏道ヲノミ求給テ、小椋山ノ麓ニ庵ヲ結給ヒ、詩ヲ造リ琵琶ヲ弾、御心ヲナグサメ給シニ、

(元慎の化身の鬼との対話 省略)

村上ノ帝、上玄石上ノ琵琶ノ秘曲ヲ、廉承武ニ伝ヘ給シニハ、猶マサリテゾ覺ユル。加様ニ目出キ御事ニ御坐シカドモ、  
F 帝位ニツカセ給フ御運ハ、可レ然御宿報ナレバ、サテコソヤマセ給ヒシカ、謀叛ヲバ起サセ給ハズ。

③ 後三条院ノ第三王子輔仁親王ハ、白河院ニハ御弟也。目出キ人ニテ御坐ヲ、「春宮御位ノ後ニハ、必此御子ヲ太子ニ可奉立」ト、  
後三条院返々白河院ニ御遺言アリケレバ、  
院モ榎ニ御言請アリ。親王ノ宮モ、「必御讓ヲ受サセ給ベキ」由、思食ケルニ、

シカバ、政務ノ道ニモ明ニ御坐ケレバ、源姓ヲ賜テ從二位右大臣ニ成奉テ、万機ノ政ヲ助奉リ給シ程ニ、冷泉院御宇、此君ノイミジク御坐ス事ヲ妬シクヤ思給ケム、時ノ関白ニ讒言セラレ給テ、官位取返サレ給テ、只本ノ宮原ニテ御坐ケレドモ、更ニ恨トモ思給ハズ、只「岩ノカケ路」トノミ念ガレテ、深心閑ナラム事ヲノミ求給フ。

(兔裘賦制作の話、元慎の化身の鬼との対話、  
龜山に水を祈り出した話、親王の死 省略)

## 廿六 後三条院ノ宮事

③ 後三条院第三皇子輔仁親王トテ御坐キ。目出キ賢人ニテ坐ケレバ、「春宮御位ノ後ニハ、必ズ御弟輔仁ノ親王ヲ太子ニ立マイラセ給ベシ」ト、  
後三条院、白河法皇ニ申サセ給ケレバ、榎ニ御事請有ケリ。宮モ、「当春宮御即位ノ後ハ、我御身御讓ヲ受サセ御坐スベキ」由、  
被ニ思食ケル程ニ、

春宮実仁、永保元年八月十五日ニ、御年十一ニテ御元服アリシカ、

応徳武年二月八日、十五ニテ失サセ給<sub>ニシ</sub>カハ、後三条院ノ御遺言ニ任テ、三宮太子ニ立セ給<sub>ヘキ</sub>ニテコソハアリシヲ、其沙汰モナシ。

承保元年十二月十六日ニ、白河院ノ一宮敦文親王御誕生、今上后腹ノ一御子ニテ御坐シカハ、是ヲ太子ニハト人々被思ケレトモ、太子ノ沙汰ナシ。三宮イカナルヘキヤラムト、御ムネハタラカセ給ケルニ、承暦元年八月廿六日、御年四歳ニテ失給<sub>ニ</sub>ケリ。

三宮、今ハト被思食ケルニ、同三年七月七日、堀河院御誕生アリ。同年十一月三日、親王ノ宣旨被下ニケレハ、トニカクニ三宮引違ラレ給ヘリ。

堀河院モ八歳マテ太子ニモタ、セ給ハズ、親王ニテ、応徳三年十一月廿六日ニ、御讓ヲ請サセ給テ、ヤカテ其日、春宮ニ立セ給<sub>ヒ</sub>、

寛治三年正月五日、御歳十一ニテ御元服アリケリ。三宮ハ御位ニコソ叶ハストモ、太

東宮実仁、永保元年八月十五日ニ、御年十一ニテ御元服アリシガ、

応徳二年二月八日、十五ニテ隠レサセ給シカバ、後三条院ノ任御遺言、三宮輔仁太子ニ立セ給ベカリシヲ、無<sub>ニ</sub>其御沙汰。

承保元年十二月十六日ニ、白川院ノ一宮敦文親王御誕生、今上后腹ノ一御子ニテ御座シカバ、太子ニ立セ給ベカリシカ共、

承暦元年八月六日、御トシ四歳ニテ失給<sub>ケ</sub>リ。

同三年七月七日、堀川院御誕生アリ。同年十一月三日、親王ノ宣旨ヲ下サレニケレバ、左ニ右ニ三宮被<sub>ニ</sub>引違<sub>テ</sub>給ヘリ。

堀川院モ八歳マテ太子ニモ立セ給ハズ、親王ニテ、応徳三年十一月廿六日ニ、受<sub>テ</sub>御讓サセ給テ、馳其日、春宮ニ立セ給。

寛治三年正月五日、御年十一ニテ御元服有ケリ。三宮ハ御位ニコソ不<sub>レ</sub>叶共、太子ニモ

春宮実仁、永保元年八月十五日、御歳十一ト申シニ、小野宮亭ヨリ照陽舎ニ移ラセ給テ、御元服アリシ程ニ、

応保二年二月八日、御歳十五ニシテ敢ヘナク失給ニシカバ、後三条院申置セ給シガ如ク、三宮、太子ニ立給フベカリシヲ、其沙汰無リケリ。

承保元年十一月十二日、白河院一宮敦文親王御誕生、今生后腹ノ第一ノ皇子ニテ御坐シカバ、無<sub>ニ</sub>左右太子ニ立給ヘリシ間、其沙汰無テワタラセ給シカドモ、敦文親王、

承暦元年八月六日、御年四歳ニシテ失給<sub>ヘ</sub>リ。

同三年七月九日、六条右大臣顕房公御娘ノ御腹ニ堀河院御誕生、同年十一月三日、親王ノ宣旨ヲ被<sub>レ</sub>下タリケレドモ、太子ニハ立給ハズ。「此等ハ三宮ノ御事、後三条院ノ御遺言ヲ畏サセ給故」トゾ、古キ人ハ申侍シ。

雖<sub>レ</sub>然、応徳三年十一月廿八日、御年八歳ニシテ讓ヲ得サセ給、ヤカテ同日、春宮トス。善仁王是也。太子ニモ立給ハズ、親王ニテゾ御位ニ即セ給ケル。

子ニモト責テハ被思食ケレトモ、終ニ不叶。  
寛治三年六月二日、三宮陽明門院ニテ御元服アリシカトモ、

康利<sup>和</sup>五年正月廿六日、鳥羽院御誕生アリテ、同年八月十七日、春宮ニタ、七給<sup>ニ</sup>シカハ、三宮太子ノ御沙汰<sup>ニ</sup>モ不及。其後者思食切<sup>ニ</sup>七給<sup>ニ</sup>ケリ。何計<sup>カ</sup>無本意モ被思食ケム。サレトモ、仁和寺ノ花園ト云所ニ住セ給ケルニ、法皇ヨリ、「イカニト、イツトナクサヤウニハヲハシマスカ。時々ハ御出仕ナトモ候ヘシ」トテ、国、庄園ナトアマタ被進ケル。御返事ニ、

有花有<sup>レ</sup>獸山中友、無愁無<sup>レ</sup>歎世之情  
ト申サセ給タリ。惣ヘテ詩歌管絃ノ道ニ勝テ御坐ケレハ、代ニモナク司モナキ人々ハ、院内ノ御事ヨリ、中々メツラシク奉思テ、参通フ人多リケリ。  
時人、「三宮百大夫」トゾ申ケル。

G 御位相違セサセ給シカトモ、世ノ乱ハイテコサリケリ。

④ 此宮ノ御子花園ノ左大臣有仁ヲ、白河院ノ御前ニテ元服セサセ奉セツ、源

ト思召ケルニ、

寛治元年六月二日、三宮陽明門院ニテ御元服有シニ、太子ノ御沙汰ニモ及バザリシカバ、

輔仁親王御位空シテ、  
仁和寺ノ花園ト云所ニ住セ給ケリ。白川法皇ヨリ、「何ニ、イツトナクサ程ニ引籠ラセ給ニカ。時々ハ御出仕ナンドモ候ヘシ」トテ、国庄アマタ被進ケル。御返事ニ、

有<sup>レ</sup>花有<sup>レ</sup>獸山中友、無<sup>レ</sup>愁無<sup>レ</sup>歎世上情  
ト申サセ給タリ。スベテ詩歌管絃ニ長ジ御座シカバ、世ニモナク官モナキ人々ハ、院内ノ御事ヨリモ、中々珍シク奉思テ、参通人多カリケレバ、  
時人、「三宮ノ百大夫」トゾ申ケル。

G 御位相違有シカ共、世ノ乱ハナカリシ者ヲ。

④ 三宮ノ御子花園左大臣有仁ヲ、白河院ノ御前ニテ元服セサセ進セ、源氏ノ姓ヲ奉

寛治元年六月二日、陽明門院ニテ御元服ハ有シカドモ、太子ノ沙汰ニモ及バズ。

康和五年正月十六日ニ、鳥羽院御誕生アリシカバ、イツシカ其年ノ八月十七日ニ、太子ニ立セ給ニシカバ、三宮ハ思召切テ、

仁和寺ノ花園ト云所ニ籠居セサセ給タリケルニ、法皇ヨリ、「イカニ、イツトナクサ様ニテハマシマスニカ。時々ハ京ナドヘモ出サセ給ヘカシ」ナド、細々ト被仰テ、国、庄園ナドアマタ奉ラセ給タリケル。御返事ニハ、

有<sup>レ</sup>花有<sup>レ</sup>獸山中友、無<sup>レ</sup>愁無<sup>レ</sup>歎世上情  
ト申サセ給タリケリ。惣ジテ詩歌管絃ノ道ニ勝テマシケレバ、人申ケルハ、中々世ニモ無ク官モハセヌ人ハ、院内ノ御事ヨリモ珍シク思奉テ、人參リ通フ輩多カリケレバ、時ノ人ハ、「三宮ノ百大夫」トゾ申ケル。

G カ、リケレドモ、御即位相違シテケレバ、三宮イカバカリ本意ナク被思食ケメドモ、世ノ乱ヤハ出来シ。

④ 此宮ノ御子花園左大臣ヲ、白河院ノ御前ニテ御元服セサセ進セテ、源氏ノ姓ヲ賜

氏ノ姓ヲ給セテ、無位ヨリ一度ニ三位シテ、ヤカテ中将ニ成シ奉ラレケリ。是ハ三宮輔仁ノ親王ノ御怨ヲモ奉リ、又御三條院ノ遺言ヲモヲチサセ給ケルニコソ。一世ノ源氏、無位ヨリ三位シ給フ事ハ、嵯峨天王ノ御子揚成院ノ大納言定卿ノ外、其例無トソ承ル。

(改行)

⑥ 白河院ノ御子金子内親王ヲハ、二条

ラセ給テ、無位ヨリ一度ニ三位シテ、ヤガテ中将ニナシ奉ケリ。是ハ三宮輔仁親王ノ御怨ヲ休奉リ、又後三條院ノ御遺言ヲモ恐サセ給ケルニコソ。一世ノ源氏、無位ヨリ三位シ給事ハ、嵯峨天皇ノ御子揚院大納言定卿ノ外、無<sub>レ</sub>其例。

滿仲護<sub>ニ</sub>西宮殿

⑤ 冷泉院御位ノ時、覺御心モナク、御物狂ハシクノミ御座ケレバ、「ナガラヘテ天下ヲ知召サン事モイカ。」ト思食ケルニ、御弟ノ染殿式部卿宮ハ、西宮ノ左大臣ノ御婿ニテオハシケルヲ、「能人ニテ渡ラセ給」ト申ケレバ、中務丞橋敏延、僧連茂、多田ノ滿仲、千晴ナド寄合テ、「式部卿宮ヲ取奉テ東國ヘ赴、軍兵ヲ起、即位進セン」ト、右近ノ馬場ニテ夜々談儀シケル程ニ、滿仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ、西宮殿ハ被<sub>レ</sub>流罪ニ給ニケリ。敏延ハ、「播磨國ヲ賜ラン」、連茂ハ、「一度ニ僧正ニナラン」トテ、係事ヲ思立ケリ。(以下略)

仁寛流罪

⑥ 白川院ノ御子金子内親王ヲバ、二条皇

ラセ給テ、無位ヨリ一度ニ三位シツ、、聽中將ニ成奉ラレタリケルハ、輔仁ノ親王ノ御愁ヲ休メ、且ハ後三條院ノ御遺言ヲ恐サセ給ケル故トカヤ。一世ノ源氏、無位ヨリ三位シ給事ハ、嵯峨天皇ノ御子陽院大納言定卿ノ外ハ不<sub>レ</sub>承及。

⑤ 冷泉院御位ノ時、ウツ、御心モ無ク物狂シクノミ御坐ケレバ、「長ラヘテ、天下ヲ知食事イカ。」ト思ヘリケルニ、御弟ノ染殿ノ式部卿ノ宮、西宮ノ左大臣ノ御弟ニテ御坐シケリ。「ヨキ人ニテ渡ラセ給」ト人思ヘリ。中務少輔橋敏延、僧連茂、千晴ナドガ、「式部卿宮ヲ取奉テ、東國ヘ趣テ、軍兵ヲ語ツ、位ニ即奉ム」ト、右近馬場ニテ、夜ナク議シケルヲ、多田滿仲此由ヲ奏聞シタリケレバ、西宮殿ハ被<sub>レ</sub>流給ニケリ。西宮殿ハ知給ハザリケルヲ、敏延ハ、「播磨國給ハラム」、連茂ハ、「一度ニ僧正ニ成ラン」ナド思テ、カ、ル事ヲ思ヒ立ニケリ。(以下略)

⑥ 白河院ノ御子ノ金子ノ内親王ヲバ、二

ノ皇太后宮ト申ケル。鳥羽院ハ、康和五年正月十六日ニ御誕生。同八月十七日ニ春宮ニ立セ給フ。

嘉承二年七月十九日、御年五歳ニテ位ニ即セ給タリケレハ、御母代トテ内裏ニ坐セ給ケルニ、其御方ニ、永久元年十月比、落事アリ。「醍醐ノ勝覚僧都ノ童千手丸ト云者アリ。人ノ語ニヨテ、君ヲカシ奉セムトテ、常ニ内裏ニタ、スミテ候也」トソ申タル。此落事ノ院ヘ進セ御坐シタリケレハ、白河法皇大ニ驚セ御坐テ、檢非違使盛重ニ仰テ、千手丸ヲ擲取テ推問セラレケレハ、「醍醐仁寛阿闍梨ガ語ナリ」ト申ケリ。

カノ仁寛ハ、三宮ノ御持僧也。「其ノ御宿意ヲ遂カ為ニ、彼童、或ハ上童ノ形、或内侍ノ形ニテ、日々夜々ニ便宜ヲ伺候ツレトモ、不叶シテ、今カク成候ヌ」トソ落タリケル。ヤカテ盛重ニ仰テ、仁寛ヲ召取テ、法家ニ下テ罪名ヲ勘フ。其勘状ヲ以テハ、公卿僉儀アリ。

断罪ニアタウトイヘトモ、死罪ヲ留テ、遠流ニ被定。仁寛ヲハ伊豆国ヘ遣シ、千手丸ヲハ佐渡ヘ遣ス。サレトモ死罪ニモ不被行、被定遠流ニケルコソ、皇化ト覺テ止事ナシ。縁者ノ沙汰アリケルヲハ、大藏

太后宮トゾ申ケル。鳥羽院ハ康和五年正月十六日ニ御誕生、同八月十七日ニ東宮ニ立セ給テ、

嘉承二年七月十九日、御年五歳ニテ位ニ即セ給ケレバ、御母代トテ内裏ニ渡ラセ給ケルニ、其御方ニ、永久元年十月ノ比落書アリ。折節怪童ノ有ケルヲ擲テ問ケレバ、醍醐ノ勝覚僧都ノ童千手丸也。「人ノ語ニ依テ、侵レ君進セントテ、常ニ内裏ニタ、ズムナリ」トゾ申ケル。法皇大ニ驚思食、檢非違使盛重ニ仰テ、千手丸ヲ被レ推問。「醍醐寺ノ仁寛阿闍梨ガ語也」ト申ス。

彼仁寛ハ、三宮ノ御持僧也。「御位ノ御宿願ヲ遂サセ給ハンガ為ニ、或青童ノ兒、或内侍ノ形ニテ、日夜ニ奉レ伺便宜キ。不叶シテ今カク成侍ヌ」トゾ落タリケル。ヤカテ仰レ盛重仁寛ヲ召捕テ、公卿僉議アリ。

罪斬刑ニ当ルトイヘ共、死罪一等ヲ減ジテ、遠流ニ定、仁寛ヲバ伊豆国、千手丸ヲバ佐渡国ヘ遣シ、流ケル。サシモ重科ノ者ナレ共、カク被レ寛ケル事、皇化ト覺テ止事ナシ。其上、縁者ノ沙汰アリケルヲ、大藏卿為房

条ノ大宮トゾ申ケル。

鳥羽院ノ位ニ即セ給ケルニ、御母代ニテ皇后宮トテ内裏ニ渡セ給ケル、御方ニ、永久元年十月ノ比落書有ケリ。「醍醐ノ勝覚僧都ノ童二千寿丸ト申ガ、人ノ語ニヨリテ、君ヲ犯シマイラセムトテ、常ニ内裏ニタ、ズミアリク」ト申ケリ。皇后宮ノ御方ヨリ此落書ヲ白河院ヘ進ラセサセ給タリケレバ、法皇大ニ驚セ給ヒツ、檢非違使盛重ニ仰テ、此千寿丸ヲ擲テ被レ問ケレバ、「醍醐ノ仁寛阿闍梨ガ語也」ト申。

彼ノ仁寛ハ是、三宮ノ御持僧ナリケリ。或ハ上童ノ体ニモテナシ、或ハ内侍ノ亮ヲフルマヒテ、年々ヨナク便宜ヲ伺ヒケレドモ、掛クモ忝ナシ、ナジカハ本意モ遂ベキイマノシトモ云ハカリナシ。盛重ヲ以テ仁寛ヲ被レ尋。仁寛承伏申ケル上ハ、法家ニ仰付テ罪名ヲ勘ル。法家勘状ヲ以テ、公卿僉議アリ。

罪、斬刑ニアタレリケレドモ、死罪一等ヲ減ジテ、遠流被レ定。仁寛ヲバ伊豆国ヘ遣ハス。千寿丸ヲバ佐渡国ヘ遣シテケリ。サシモノ重過ノ者ヲ宥ラレケル事コソ、皇化ト覺テヤサシカリケル御事ナレ。大藏卿為



卿為房參議シテ、僉儀ノ庭ニ候ケルカ、「父母兄弟不可為罪科」ト被申ケレハ、

当座ノ諸卿、「為房卿ノ儀ニ同ズ」トソアリケル。縁者ノ沙汰ニ及サリケリ。イミシカリシ御代ノ政也。「彼為房卿ハ、公ノ為ニ忠アリ、人ノ為ニ仁アリ。子孫繁昌シ給モ理也」トソ人申ケル。(改行)

5

六条殿ト申ケル女房ノ御腹ニ、法皇ノ御子御坐ケリ。故建春門院ノ御子ニマイラセテ、七歳ニテ安元々々年七月五日、天台座主快修権僧正御房へ入レマイラセサセ給テ、釈子ニ定リ坐シケレトモ、未御出

參議ニテ、僉議ノ座ニオハシケルガ、「加程ノ惡逆必シモ父母兄弟ノ結構ニアラジ、然者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>罪科<sub>一</sub>歟」ト被<sub>レ</sub>申タリケレバ、

当座諸卿、皆、「為房卿ノ議ニ同ズ」トテ、縁者ノ沙汰ハナカリケリ。「為<sub>レ</sub>君ニ忠アリ、為<sub>レ</sub>人ニ仁アリ、為房卿、子孫繁昌シ給モ理也」トゾ人申ケル。

H 昔モ淺増キ様アリケレ共、及<sub>二</sub>子孫<sub>一</sub>事ハナカリキ。高倉宮討<sub>レ</sub>サセ給ヌレバ、今ハ何条事カハ有ベキナレドモ、小宮々毛角成セ給ケルコソ糸惜ケレ。

六条殿ト申ケル女房ノ御腹ニ、法皇ノ御子オハシケリ。故建春門院ノ御子ニシ進テ、七歳ニテ安元々々年七月五日、天台座主快修僧正ノ御房へ入進テ、釈子ニ定マシ<sub>レ</sub>ケレ共、未御出家ハナカリケリ。高倉宮毛角成給ヌ、

房參議シテ、僉議ノ座ニ候ハレケルガ、「父母兄弟ハ死罪ニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>」ト被<sub>レ</sub>申ケレバ、

諸卿、「尤可然」之由、一同ニ被<sub>レ</sub>申テ、縁座ニ及バザリケリ。彼為房卿ハ、君ノ為ニ忠アリ、人ノ為ニ仁ヲハシケリ。サレバ今子孫ノ繁昌シ給モ理ナリ。

I 此ヲバ非職ノ輩オホケナキ事ヲ思企タリケリ。今ノ三位入道ノ思立レケムハ、是ニハ似ルベキ事ナラネドモ、遂ニ前途ヲ不<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>シテ、宮ヲ失ヒ奉リ、我身モ滅ヌル事コソ、返<sub>レ</sub>グモアサマシケレ。

廿七 法皇ノ御子之事

六条殿ト申ケル女房ノ御腹ニ、法皇ノ御子ノ御座ケルヲバ、兵部大夫時行御娘、故建春門院ノ御子ニ養マイラセテ、七歳ニテ、去ジ安元々々年七月五日、座主宮ノ御坊へ奉<sub>レ</sub>入テ、釈子ニ定ラセ給タレドモ、未<sub>レ</sub>御出家無リ

家ハナカリケリ。高倉宮モカク成セ給又、御子達モ、アナクリトラレサセ給ト聞ヘケレハ、「穴恐」トテ、日次ノ善悪ノ沙汰ニモ及ハス、周章騒テ剃落シ奉ケリ。今年八十二歳ニ成セ給ヘリ。カ、ル乱ノ世ナリケレハ、御受戒モナシ、只沙弥ニテソ御坐ケル。

J 「風吹ハ木安カラスト、ヨソマテモ心クルシカリケリ。世ノ為、人ノ為、身ノ為、家ノ為、無由事ヲ申勸マイラセテ亡ニケル三位入道カナ」ト、貴賤上下口々ニ匍リアエリ。  
A ユ、シクコソ申シカトモ、遠国マテハ不及申、近国ノ者タニモ一人モ打上ルナシ、山門大衆タニモ心替シテシカハ、不及力。

其御子達モ搜取レサセ給ト聞エケレバ、「穴恐」トテ、日次ノ御沙汰ニモ不<sub>レ</sub>及、周章騒テ剃落シ進ケリ。今年八十二歳ニゾ成セ給。係乱ノ世也ケレバ、無<sub>レ</sub>御受戒、只沙弥ニテゾ御座シケル。

6 再満院大輔登山(省略)

三位入道歌等

A 源三位入道ハユ、シク計ヒ申タリケレ共、遠国ノ者マデハ不<sub>レ</sub>及云、近国ノ源氏タニモ恩ギ打上ル一人モナシ、山門ノ大衆ハ心替シツ。不<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>其先途<sub>一</sub>。

J 「風吹バ木不<sub>レ</sub>安ト、世ノ煩、人ノ歎、為<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>家無<sub>レ</sub>由事申勸マヒラセテ亡ヌル者カナ」ト、貴賤口々ニ申ケリ。

シガ、高倉宮カク成セ給テ、御公達マデダグリ求ラレケレバ、「穴恐シ」トテ、日次ノ善悪ニモ及ズ、アハテ、御ケシ剃オロシ奉ニケリ。今年八十二歳ニゾ成セ給フ。カ、ル世ノ乱ナレバ、御受戒ノ沙汰ニモ不<sub>レ</sub>及、沙弥ニテゾワタラセ給ヒケル。

J 風吹バ木不<sub>レ</sub>安、心地シテ、余所マデモ苦シカリケリ。為<sub>レ</sub>身、為<sub>レ</sub>人、無<sub>レ</sub>由事引出タリケル頼政哉。

7

廿八 頼政又へ射ル事 付三位ニ叙セシ事

彼三位入道ハ、清和帝ノ第六ノ皇子貞純親王ノ三代ノ後胤、参河守頼綱ガ孫、兵庫頭伸正ガ子也。保元合戦之時、御方ニテ一方ノ先陣ヲ給リ、凶徒ヲ退ケタリケレトモ、サセル勲功賞ニモ不預。又、平治逆乱ノ時モ、親類ヲ奇テ御方ヘ参タリシカトモ、恩賞疎ナリシカハ、怨ヲ含テアリシホトニ、大内ノ守護シテ年久クナリシカトモ、殿上ヲユルサレサリケレハ、年タケ齡傾テ後、二条院ノ行幸アリケル夜、月ノ明カナリケルニ、述懐ノ和歌一首仕テ、殿上ヲハ被免タリケル。

① 人シレス大内山ノ々守ハ、

木カクレテノミ月ヲ見カナ

トヨミテ進セタリケレハ、四位シテ昇殿ヲ許サレケリ。

始テ殿上ヲ通ケルニ、或女房、

② 月ノシクモサシアユムカナ

ト云カチタリケルニ、頼政聞モアエス、

イツシカニ雲ノ上ヲハフミナレテ

ト付タリケリ。聞ニ合テ、優ニカヒシクトソ感シケル。

是ノミナラス、法皇、樗火桶ニ「頼政」ト事付サセ給テ、「是ヲ隱題ニテ歌讀テ進セヨ」ト仰ヲ蒙テ、カクソヨミタリケル。

彼入道ト申ハ、清和帝ノ第六皇子貞純親王ノ二代ノ苗裔、多田新發滿仲ガ子、摂津守頼光ガ三代ノ後胤、参河守頼綱ガ孫、兵庫頭伸正ガ子也。保元ノ合戦ノ時、御方ニテ一方ノ先陣ヲ賜リ凶徒ヲ退タリケレト共、指ル勲功ノ賞ニモ不預、怨ヲ含ナガラ、大内ノ守護シテ年久ク成、地下ニノミシテ殿上ヲユリザリケレバ、

① 人シレスオホ内山ノ山モリハ、

木隠テノミ月ヲ見カナ

ト読テ進ミタリケレバ、「不便ナリ」トテ、四位シテ昇殿ヲ免ル。

始テ殿上ヲ通リケルニ、アル女房ノ、

② ツキノシクモアユブモノカナ

ト云タリケレバ、頼政トリアヘズ、

イツシカニ雲ノ上ヲバ踏ナレテ

ト申タリケレバ、優ニ甲斐シト感ジケリ。

又、四位ノ殿上人ニテ久世ニ仕エ奉ケルニ、述懐仕テ、  
③ 上ルベキタヨリナケレバ木ノ本ニ

禍虫

(以下、鶴退治は一方系本文からの混態のため、禍虫は独自記事のために省略)

◎ 宇治河ノ瀬々ノ岩波ヲチタキリ

ヒヲケサイカニヨリマサルラム

ト仕テ進タリケリ。

勳賞被行ト思食ケルニ、又、述懐仕テ進

タリ。折節、四位殿上人ニテアリケレハ、

④ ノホルヘキタヨリナケレハコノモトニ

シイヲヒロヒテ世ヲ渡カナ

トアリケレハ、七十五ニテ三位<sup>ヲ</sup>免ケリ。

椎ヲ拾テ世ヲ渡哉

ト申タリケルニ依テ、七十五ニテ三位ヲ

被<sup>レ</sup>免テ後、前途既ニ遂ヌトテ出家シテ、

源三位入道トモイハレケリ。

大方此頼政ハ、歌ニ於テハ手広者ニゾ被<sup>ニ</sup>

思召<sup>ニ</sup>ケル。鳥羽院御時ニ、宇治河・藤鞭・

桐火桶・頼政ト、四題ヲ下サセ給、「一首

ニ隱シテ進ヨ」ト勅定アリケルニ、

◎ 宇治川ノセ、ノ淵々落タギリ

ヒヲケサイカニ寄マサルラン

ト申タリケレバ、時ノ人々、「我々ハ一ノ

題ヲダニモ一首ニ隱ハユ、シキ大事ナルニ、

アマタノ題ヲ程ナク仕タル事、実ニ難<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>

ト感ジ申ケリ。君モ、「イミジク仕タリ」ト、

歎感有ケリ。

菖蒲前 (省略)

三位入道芸等 (頼政宝剣で石を切る話 省略)

8

誠此人、一期ノ高名ト覺シ事ハ、後白河

院ノ第一ノ御子ヲハニ条院トゾ申ケル。

久寿二年九月廿三日ニ、御歳十三ニテ、

春宮ニ立セマシ<sup>ク</sup>、保元三年八月十一

日ニ、御歳十六ニテ御即位アリケルニ、

応保ノ比、御心地例ナラヌ御事ニテ、夜

後白川院第一御子ヲバニ条院トゾ申ケル。

去久寿二年九月廿三日、御歳十三ニテ、春

宮ニ立セ御座シ、保元三年八月十一日、御

年十六ニテ御即位アリケルガ、平治二年ノ

夏ノ始ヨリ御不<sup>レ</sup>予ノ御事マシ<sup>ク</sup>ケリ。五

月上旬ノ比ハ、御惱コトノ外ニ取頼ラセ給

深ク人定ル程ニナリケレハ、俄ニヲヒエ給ケリ。

度々重リケレハ、一院ヲ始奉テ、天下ノ騷キ不斜、諸寺諸山ニシテ御祈始、医家ニ仰テ御薬ヲス、メマイラセケレトモ、更驗シナカリケリ。アルヲリ、見ハ、東三条ノ木村ヨリ黒雲一村漏出テ、御殿ノ棟ノ上ニカカリ、ヌエト云鳥ノ音ノスル時、必スヲヒエサセ給ケリ。

此事イカ、有ヘキト、公卿僉儀アリ。

「寛治ノ比、堀河院如然々夜々ワツラハセ御坐ケルニハ、武士ニ仰テ警固可有由諸卿定メ申サレシニヨテ、其時、將軍八幡太郎義家ニ仰テ、宣旨ヲ承テ、香ノ将衣ニ山鳥ノ尾ノ、征矢ノ以外ニフルヒタルニ、塗籠藤ノ弓ノ拳太ナルニテ、南殿

テ、夜深人定ル程ニハ、俄ニ必ヲビヘタマガラセ給ケリ。

異説云、仁安元年ノ春ノ比、可レ有春宮御即位ニ由有<sub>レ</sub>其沙汰。此東宮ト申ハ高倉院ノ御事也。五条高倉ニ栖セ給ケレバ高倉宮トゾ申ケル。同年四月中旬ヨリ宮御惱アリト云云。

一院不<sub>レ</sub>斜歎思食テ、諸寺諸山ニシテ御祈ヲ始メ、医師ニ仰テ御薬ヲ勸メ參セケレ共、更ニ其驗マシマサズ見エケレバ、東三条ノ森ヨリ黒雲一叢立来、南殿ノ上ニ引覆、鴛ト云鳥ノ音ヲ鳴時ニ、必振タマガラセ給ヒケリ。

天下ノ大ナル歎也ケレバ、日夜ニ諸卿參内アリテ、各僉議アリ。「有驗ノ驗者ニテ可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>祈歎、以<sub>ニ</sub>博士<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>送歎」ナンド取々ニ被<sub>レ</sub>申ケルニ、徳大寺左大臣公能<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申ケルハ、「目ニ不<sub>レ</sub>見物ナラバ可<sub>ニ</sub>祈祭<sub>一</sub>。是ハ目ノ当也、弓ノ上手ヲ以テ射サスベキ歎。其故ハ、去寛治年中ニ、堀河院御惱ノ事御座キ。療治モ祈禱モ叶ハザリケルニ、公卿僉議アリテ、此御惱非<sub>ニ</sub>直事<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>武士<sub>ニ</sub>大内ヲ可<sub>レ</sub>警固<sub>ト</sub>テ、八幡太郎義家ニ仰ス。義家蒙<sub>レ</sub>勅テ、甲冑ヲ着シ弓箭ヲ帶シテ、南庭ニ立跨、殿上ヲ睨テ高声ニ、「清和ノ

ノ大床ニ候シテ、御惱ノ刻限ニ及テ、

弦ウチスル事、三ヶ度ノ後、「前陸奥守源義家」ト、タカラカニ三ヶ度ナノル。弦カテノ音モ、名乗音トモ、御所中ニ響ワタリケレハ、皆人身ノ毛ヨタチケリ。即御惱ヲコタラセヲハシマシニケリ。然者、任住例、今度モ武士ヲモテ、警固有トテ、左大臣頼長ノ、「是ヲイツヘキ武士ヤ有」ト、源平ノ中へ御尋アリケルニ、頼政撰ヒイタサル。

即大内ニ被召、「此怪鳥射テ進セヨ」ト諭旨ヲ下サル。頼政勅定ノ忝ニヨテ、今夜是ヲ可射ニ定テ宿所へ帰ヌ。日影漸ク西ノ山ノハニカクレ、タソカレトキニモ成シカハ、京中貴賤見物セムトテ、大内ノ門前ニ成市<sup>一</sup>。

帝ニハ四代ノ孫、多田新発満仲ガ三代ノ後胤、伊予守頼義入道ガ嫡男、前陸奥守源義家大内ヲ守護シ奉、イカナル悪霊・鬼神也トモ、争望ヲナスベキ、罷退ケ」ト名乗懸テ、弓ノ絃ヲ三度鳴シタリケレバ、殿上モ階下モ身毛堅テ覚ケルニ、御惱忽ニ癒サセ給ケリ。去バ是ハ怪鳥力変化カ、目ニ顕タル者也、以テ武士射サスベキ也」トゾ被<sup>二</sup>勘申ケル。大臣・公卿、「此義尤可<sup>レ</sup>然」トテ、弓ノ上手ヲ勝ラレケリ。「源平ノ中ニ何ナルベキゾ」ト義定有ケルニ、  
(石川次郎秀廉、勅命を辞し、面目を失う省略)

其後誰ヲカト有<sup>レ</sup>僉議。関白殿ノ仰ニ、「頼光ガ末葉頼政、器量ノ仁ニ当レリ」トテ、源兵庫頭ヲ召レケリ。頼政ハ、「例ノ歌道ノ御会ニヤ」トテ、木賊色ノ狩衣ニナリ、見澄シテ参タリ。「深夜ニ臨テ媚物アリ、玉体ヲ奉<sup>レ</sup>侵。及其期、明見仕」ト仰ケレバ、頼政畏、「承候ヌ」トテ御前ヲ罷立テ、近衛川原ノ宿所ニ帰ル。本ノ装束脱替テ、朝敵ヲ鎮ル兒ニゾ出立ケル。生衣ノ捻重ニ黄ナル大口、葉早黄色ノ直垂ヲゾ著タリケル。彼直垂ニハ、左ノ肩ニハ八幡大菩薩ト縫、右ノ肩ニハ山鳩ヲ縫タリケル。産衣ト云鑑ヲ著テ、男山三度奉<sup>二</sup>伏拜、其後鑑

頼政ハ憑切タル郎等、遠江国住人平太ト云者ニ、鷲ノカサキリ矯タル胡籙負セテ、我身ハ滋藤ノ弓ニ、鏑矢ニ引目一二ノ矢ヲモチ、タモトナヨラカニカイツクロヒ、殿上ノ庭上ニ候テ、「八幡大菩薩、今朝石清水ヘ參テ候ケルハ、はや最後の參詣に候けり。目さすとも不知闇夜に、只も不見変化の物を射よとの宣旨を蒙そ心うき。射はつさむ事決定也。さらは弓箭の家を別、本鳥を切シ事、心優覚候。若猶氏人々々たるへく、弓箭の冥加候へきならは、何る物なりとも、満中を射させ給へ、勅定難黙止」とて、庭上ニ立ハタカリ、殿上ノ棟ノ上ヲ守り伺て居タル、其気色ゆ、しく、憑敷を見たりける。

ヲバ脱置テ直垂小袴計也。郎等ニ丁七唱・遠江国住人早太ト云者二人ヲ相具タリ。唱ハ小桜ヲ黄ニカヘシタル腹巻ヲ著セ、十六指タル大中黒ノ矢ノ表ニ水破・兵破ト云鏑矢ニツ差、雷上動ト云弓ヲ持セタリ。水破ト云矢ハ黒鷲ノ羽ヲ以テハギ、兵破ト云矢ヲバ山鳥ノ羽ニテハギタリケリ。早太ニハ骨食ト云太刀ヲ懷ニサ、セタリ。  
 (水破・兵破、雷上動の弓箭の由来 省略)  
 「目ニモ見エヌ媚物ヲ而モ五月ノ暗夜ニ射ヨ」トノ勅命、弓取ノ運ノ極ト覺タリ。「天下ニ住乍蒙朝恩器量ノ仁ト被撰。非可辭申」トテ主従三人出ケルガ、頼政向「早太、「我所存汝得タリヤ」ト問ケレバ、「先立存知仕テ侍。今度殿下ヨリ蒙仰給、媚物ヲ殿上ニテ一矢ニ射損タラバ、二ノ矢ニ可奉射殿下。去バ廳テ以骨食我御頸ヲ給テ出ヨ」トコソ被思召候ラヌ。  
 振舞侍ベシ」ト申ケレバ、「汝ガ言ハは大菩薩ノ御託宣トコソ覺ユレ。憑ムゾヨ」トテ、宿所ヲ出テ陣頭ニ參ジ、河竹具竹ノ北南ニテ明見仕ル景氣、誠ニ優ニシテ頬魂ヒ武勇ノ大将ト見タリ。  
 「頼政宣旨ヲ蒙テ媚物射ンズル、見ヨ」トテ、公卿殿上人參集、堂上堂下内外、男女市ヲナセリ。今ヤ〜ト通夜是ヲ待。

其時刻にも成にけれハ、如案一東三条の森より黒雲一村ひきわたし、御所の上に係つ、又此鳥の音ぞしける。

折節、五月余の事なるうゑ、大方の空もかきくもり、いふせきほとなれハ、そこはかとハみえねとも、

鳥の鳴音をしるしにて、始大引目をほと射たりけれハ、鳥驚て、ひ、めき上ル所を小鎗をうちくはせて、よひきハツと射たりけれハ、失答答慥慥にすると覚けるに、庭上に太ナル物、トウトヲチタリケリ。其時、「兵庫頭頼政、変化ノ物仕タリヤ」ト、大音ヲ以テ叫タリケレハ、郎等ノ平太、ツト寄合、取テヲサへ、ト、メヲサシテケリ。貴賤上下、上ヲ下ニ返シ、女房南房・堂上堂下、サ、メキテ手々ニ火ヲトモシ、是ヲミルニ、スカタハ猿、足面はタヌキ、尾ハ狐、腹ハクチナワ、足

子ノ刻モ過ヌ、丑ノ刻ノ半ニ及テ、如例東三条ノ森ヨリ黒雲一叢立渡、御殿ノ上ニ引覆トシケレバ、主上ハホトト振ヒ出サセ給ケリ。

頼政ハ黒雲トハ見タレ共、天ハ実ニ暗シ、イツクヲ射ルベシト矢所サダカナラズ、心中ニ、「帰命頂礼八幡大菩薩、国家鎮守ノ明神、祖族帰敬ノ冥応ニ御座、頼政頭ヲ傾ケテ年久、今蒙勅命怪異ヲ鎮ントス、射ハツシナバ速ニ命ヲ捨ベシ、氏人トタルベクハ深守トナリ御座セ」ト男山三度伏拝ミ、心ヲシツメテ能見レバ、黒雲大ニ聳テ御殿ノ上ニウズマキタリ。頼政水破ト云矢ヲ取テ番テ、雲ノ真中ヲ志テ能引テ兵ト放ツ。ヒト鳴テカ、ル処ニ、黒雲頼ニ騷テ御殿ノ上ヲ立、鶉ノ声シテヒ、ナキテ立所ヲ見負テ、二ノ矢ニ兵破ト云鎗ヲ取テ番、兵ト射。ヒイフツト手答シテ覚ユルニ、御殿ノ上ヲコロトコロビテ庭上ニ動ト落。

其時ニ、「兵庫頭源頼政、変化ノ者仕タリヤ」ト叫ケレバ、唱ツト寄テ、「得タリヤ」トテ懐タリ。貴賤上下・女房男房、上ヲ下ニ返シ、堂上モ堂下モ指燭ヲ出シ炬火ヲトボシテ見之。早太寄テ繩ヲ付、庭上ニ引スヘタリ。有「観覧ニ癖物也。頭ハ猿、背ハ虎、尾ハ狐、足ハ狸、音ハ鶉也。



ハネコ、ナクヌエニソ似タリケル。「ア、イタリヤ〜」ト、口々ニコソホメタリケレ。誠弓箭取テノ高名、争可勝之。

彼変化ノ物ヲハ、平太給テ、大宮大路ニ頭ヲ下ニシテ、張付ニシタリケル。射ル所ノ矢ヲハ、末代ノ重宝也トテ、大内ニ被納ケルトカヤ。

偕コソ上ノ御惱モ忽ヲコタラセ坐シケル。

(改行)

大政天王<sup>(天)</sup>ハ、御感ノ余ニ、鳥羽院ヨリ御伝アリケル師子王ト申御劍、錦袋ニ入テ、扇ニ御衣ヲ引副テ、御自ラ取出サセ給ツ、左大臣頼長ヲシテ給ハス。頼長、大床ニシテ頼政ニタフ。頼政ハ橋ノ三階ニ右ノ膝ヲツキ、弓脇ニハサミ、左ノ袂ヲヒロケテ、御劍・御衣ヲ給ニ、頼長、連歌ヲセラレケリ。

五月ヤミ名アラハセ<sup>(マ)</sup>ヨイカナト仰ケレハ、頼政、本ヨリ好ム事ナレハ、キトカヘリミテ、

タソカレトキモスキヌトヲモフニト仕リタリ。是又時ニトテ、ユ、シカリシ事也。

「実ニ希代ノ癖物也。苟禽獸モ加様ノ徳ヲ以テ奉<sup>レ</sup>惱<sup>レ</sup>君事ノ有ケル事ヨ、フシギ也」トゾ仰ケル。見聞ノ男女ハ口々ニ、「頼政、ア、射タリ〜」トゾ嘆タリケル。彼変化者ヲバ清水寺ノ岡ニ被<sup>レ</sup>埋ニケリ。

主上ノ御惱忽ニ宜成ラセ給ニケレバ、鳥羽院ヨリ有<sup>レ</sup>御伝<sup>ニ</sup>ケル師子王ト申御劍ニ御衣一重脱ソヘテ、関白太政大臣基実公ヲ御使ニテ頼政ニ被<sup>レ</sup>下ケリ。頼政ハ橋ノ三階ニ右ノ膝ヲ突、左ノ袂ヲ擁テ畏テ是ヲ拝領ス。五月廿日余ノ事ナルニ、折知ガホニ郭公ノ一声ニ声雲井ニ名乗テ通ケルヲ、関白殿聞召テ、

郭公名ヲバ雲井ニアグルカナ

ト仰セケレバ、

弓ハリ月ノイルニマカセテ

ト頼政申タリ。

五月ヤミ雲井ニ名ヲモアグルカナ

誰カレ時モ過ヌト思フニ

ト、異本也。

誠ニ弓矢ヲ取モナラヒアラシ。連歌ニモ類ナシトソサ、メキケル。

K 加様ニ上下万人ニ嘆レテ、七十二ア  
マリ、去々年三位シテ、今年七十七ニ成  
ル入道ノ、イカナル榮ミ榮アリトモ、イ  
クホトカアルヘキニ、子息仲綱受領シテ  
伊豆国知行シ、丹波ニハ五ヶ庄ナト被志  
ケリ。サテ老ハテ給ハテ、無由事ヲ勸申  
テ、子息マテモ亡給ヌルコソ不便ナレ。  
L 木下丸カ伐執トハ云ナカラ、只事  
ニ非ス、偏ニ怨靈ノ致ス所也トソ申ケル。

実ニ弓矢ヲ取テモ並ナシ。歌ノ道ニモ類ア  
ラジト覺タリ。大国ノ養由ハ雲上ノ雁ヲ落  
シ、我朝ノ頼政ハ深夜ノ鶴ヲ射。弓矢ノ全  
事取々ニゾ覺タル。

K 加様ニ上下万人ニ被レ嘆、七十二余、  
三位シテ、今年七十七、何ナル榮ニ榮アリ  
トテモ今幾程カ有ベキ。子息仲綱受領シテ  
伊豆国知行シ、丹波ニハ五箇庄給テ、家中  
モ樂ク人目モ羨レテコソ有ツルニ、無由  
事勸申テ子孫マデモ亡ルコソ不便ナレ。  
L 馬ユヘトハ申ナガラ非ニ直事、偏ニ怨  
靈ノイタス処也トゾ歎ケル。

10

昔ヨリ山大衆コソアタハヌ詔ヲモ申、  
横紙ヲヤフル習ナレハ、此度ハ宣旨ヲモ  
不背、平家ニモ随タルニ、南都、三井ノ  
衆徒、事ヲ乱テ、寺ニハ宮ヲハ請取奉セ、  
奈良ニハ宇治ヘ御迎ニ参リナトシテ、此  
条、既ニ朝敵也。争誠ラレサルヘキト、  
大政入道大ニ安カラス忿ラレケリ。  
而間此事ナラ響キ有トテ、三井寺ニモ南

三井僧綱被レ召

三井寺ニモ南都ニモ猶尻引アテ、悪徒ノ張  
本召ルベキ由其沙汰アリ。昔ヨリ山門ノ大  
衆コソ横紙ヲヤリ、非分ノ訴ヲ致シ、今度  
ハ不レ違ニ宣旨、随ニ平家、南都・園城ニハ  
或宮ヲ入進、或御迎ニ参ツ、狼藉斜ナラ  
ザリケレバ、  
大政入道大ニ安カラヌ事ニ思宣ケリ。

9 廿九 源三位入道謀叛之由来事

(木下馬 省略)

日来ハ山門衆徒コソ騒ギオドロ／＼シク聞  
シニ、今度ハ山ニハ無別事ニシテ、南都ノ  
大衆、以外ニ騒動シケレバ、

入道相国余リ不レ安事ニ被レ思ケレバ、  
三井寺、南都ノ衆徒ノ張本ヲ可レ被レ召禁

都ニモ、悪僧張本ヲ可被召ト、其沙汰アリ。

又、南都ニモ深ク鬱テ、殿下ノ御使ヲ散々ニ陵礫シケリ。是又、只事ニ非るトソ覚シ。

M 日月顕明、浮雲覆之、河水顕清、沙石穢之、人欲平、嗜欲害之、トモ申ス。能々思慮アルヘカリケルモノヲトソ覚ヘケル。

殊ニ南都ニモ深ク鬱テ殿下ノ御使ヲ散々ニ陵礫セリ。是又、タゞ事ニアラズト覚タリ。

之由、其沙汰有ケリ。

南都ニハ深ク憤リテ、殿下ノ御使散々ニ陵礫シテ、弥悪行ヲゾ致シケル。

(さくらい・ようこ／本学教授)